

大陸（中支）

徐州戦

北川中隊五十八勇士の決死隊

兵庫県 川戸 庄治郎

時 昭和十三年四月下旬

鳥取第四十連隊は徐州攻略のために怒濤のように徐州に向かって南下した。徐州北方四キロの地点には勝陽山、禹王山、鍋山と草木一本生えてはいない小高い岩山が横たわる。この連山こそ天然の要塞であり徐州を守る最後の拠点ともなっていた。

わが北川中隊長（兵庫県）の第七中隊は連続激戦のため兵力が漸次減少、六十余名にまで落ちこんでいた。

でもわが部隊には北川中隊長、平野小隊長あり、他の中隊に比べ有力な隊であると誇りをもっていた。

わが隊はこの三連山の正面からぶつかつた。「徐州、徐州と人馬は進む」宴会ともなれば真っ先に飛び出すこの軍歌ではあるが、五十数年前の出来事でも今なお目には涙が浮かんでくる。

禹王山の山麓に下揚庄という小さな部落があり、わが北川中隊は夜陰に乘じ接近、夜明けとともに攻撃開始、麦畑の中に展開す。下揚庄の敵軍は満を持していたかのように撃ってきた。同時に禹王山、勝陽山からも加え三面から凄まじい銃弾が飛んでくる。「やられた」と言う声が出た。ふと見ると隣を走っていた兵隊が早くも倒された。見れば両大腿部貫通で、抜けた弾は左に吊っていた帯剣に当たり、その帯剣はくの字に

曲がり、血は四か所から吹き出していた。

「アッ」と思つて素早く駆け寄つた。「しっかりしとれよ」と励まし、少しでも低地へと引つ張り込む。巻脚絆をほどくのがまどろしかつた。弾はビュンビュン頭上すれすれに飛んで来る。血は四か所から盛んに吹き出し、体も地面も真っ赤に染まっていくな。大急ぎで巻脚絆をほどき出血箇所をぐるぐる巻いた。「衛生兵前へ」「担架兵前へ」声を限りに呼んだ。担架で後へ運ばれるのを見届けてから前進した。

夕方、かろうじて下場庄は奪取したものの勝陽山からの迫撃砲にさらされて、屋根のある家は一軒も無くなるまで吹き飛ばされてしまった。汗と泥にまどれ体はもうくたくただ。飯盒の飯は空、せめて一杯の水が飲みたいが一滴の水も無い。草の葉に浮いた夜露をなめて喉の乾きをいやしたのであった。

わが平野小隊に禹王山進撃の命下る。禹王山は一大隊が漸く奪取したとはいえ勝陽山からの反撃にさらされて苦戦、そのための増兵となつて進出した。暗い夜であった。足音を忍ばせ、息も殺し、静かに登つた。

「各人早く壕掘れ」の命下る。草木一本生えてはいない岩山だ。ピシッピシッと頭上すれすれの銃弾が耳をかすめる。銃は右手で匍匐になり左手だけで石ころを掻き進む。頭をあげていることさえも出来ない。顔も地面にひつつけてただ右手だけを動かし必死になつて石ころを撥ねた。

夜間とはいえ距離と角度は昼間の中に計つてあるようで百発百中の弾が飛んでくる。漸く胸だけ入るくらい穴を掘つたころ、私等の増兵に気がついたのか今度は迫撃砲がうなりをあげて飛び出した。

「ヒュードカーン」。隣で壕を掘っている兵に迫撃砲が直撃した。体は木端微塵に飛び散つて、その肉片は小石と共にわが頭上に振りかかり、影さえも無くどうすることも出来なかつた。敵は一晚中攻撃を緩めず必死の反撃が続く。それに引き替えわが方は砲兵や重火機の支援は全く無く、もう全部やられていた。である。残された道は唯一白兵戦だけになつていた。

未明に小行李の兵が飯をつめたカマスを背負つて登つて来た。「飯取りに來い」「オイ取りに來い」壕の

中から次の壕へと伝言した。タコツボの中から順を追って伏せて出る。銃は片時も手放せない。壕を掘った泥だらけそのままの手をカマスの中へ突っ込んで飯を無茶苦茶に飯盒に詰め込む。オカズなどあろうはずもない。一瞬でも早くと壕の中へ飛び込んで行く。

敵情に変化は見えず、難攻不落と思える勝陽山をにらみ、今日もタコツボの中で頑張った。ああ今日も丸い真つ赤な太陽は地平線の彼方へと沈んで行く。明日もこの夕日が眺められるであろうか。刻一刻追いつめられていくような感じがする。その夜もまんじりとはしなかった。

勝陽山の夜襲に行く平野小隊集合

夜中のことであった。北川中隊長は下揚庄にいた残余の兵を引き連れて禹王山に登ってきた。平野小隊長を先頭に禹王山の北面を尾根伝いに勝陽山を目指し中腹まで登った。暗闇の中に「止まれ」「伏せ」中隊長の低い号令がかかった。我々は一斉に石ころの上に伏せた。

「〇〇伍長は兵二名を率い勝陽山の敵状偵察を行う

可し」「残余の者は現地において待機すべし」。勝陽山の北面は静まりかえって不気味さが漂う。我々は地に伏せわずかな物音にも気を配り、付近の様子を伺い、待機の姿勢で数時間を待った。

「中隊長殿に報告」斥候が足音を忍ばせ帰って来た。「物凄いい陣地です。敵は鉄条網を張り、要塞砲らしき物あり、その敵数は数知れず。守備は堅固で、僅かこの位のわが兵力では到底成功の見込はありません。もう少し兵力を増加するか時期を待つか考えてもらいたい」「そうかご苦労であった。しかしこれは命令だ。たとえ不成功に終わっても受けた命令は遵守せねばならぬ。行く。「しかし中隊長殿いくら命令でも兵隊にも意見具申といたことがありますが。みすみす不利な戦闘ならせん方がええ。もう少し兵力を増加するか時期を待つか考えてもらいたい」「皆の言うことはよくわかる。しかしこれは命令だ。受けた命令は遵守せねばならぬ、行く」「いや駄目です」「いや行く」と、中隊長は重大な責任を負わされていた。

中隊長と兵隊との論議の続くうちに何時間かが経過

した。夜がほんのりと白んできた。日本軍が勝陽山の
中腹にいと見るや勝陽山の頂上から撃つて来た。そ
の銃弾で気がついたのか山麓の部落からも撃ち上げて
来た。完全なはさみ撃ちになってしまった。一本の遮
る木もない石ころの山膚で、我々の姿は敵の目にはま
る見えである。万事休す、仕方がなく中隊長以下誰か
らともなく自然に兵隊は下山した。中隊長はこのこと
を大隊長に報告した。大隊長は連隊長に報告した。

「北川中隊長は命令を遵守しなかった」「軍法会議だ
と言われるかも知れないぞ」「いや全く軍法会議にま
わされるぞ」兵隊は誰言うもなくこんなささやきを交
わした。兵連は中隊長が行くと言ったにも拘らず「行
かん」と言った責任を痛感せざるを得なかった。兵も
大いに後悔した。中隊長に申し訳がない、兵の責任を
中隊長一人に被せてしまった。その翌晩、第八中隊に
勝陽山夜襲の命下る。第八中隊も我々第七中隊と同じ
報告をしたために、我々は少しは安らぎの感をもった。
連隊長は後方から軽戦車でわが第一線陣地までやって
来た。

「北川中尉以下五十八名の命は、今宵限り連隊長が
もらった。北川中隊は今晩決死隊となって勝陽山を夜
襲敢行すべし」一命を降ろした連隊長は軽戦車で後方
陣地へ下って行った。わが隊がかねて攻撃奪取した下
揚庄の崩れた家屋の片隅に兵を集めた北川中隊長は静
かに一同を見回し「諸氏はかねて死ぬというのを覚
悟はしていたであらうけれども、いよいよ我々の死ぬ
時が来た。今宵十時を期し生還することは難い。今
日は昭和十三年五月二日である。今宵こそ中隊長を中
心に勝陽山を枕に討ち死をしてくれ」。「各人思い残す
ことあらば書いて背囊の中に入れておけ。背囊は持た
ぬ雑囊の中に食糧と弾薬だけはしっかりつめて肩に負
え」「それから軍靴の音のせぬように各人で工夫せよ」。

言い終わった中隊長は崩れた家屋に腰をかけ帯刀
(備前国長船祐定永正年間作)をすたり引き抜き、曇
りを払い輪に納め、遙か故郷を遥拝し、静かに「戦線
の月」を唄い出した。

一、月影淡き戦線の　しばらくの暇に筆とりて

思いを馳せる故郷の　老いたる父母よ幼児よ

二、坊やそなたの父さんは 今宵を限り外つ国の
土と交わりて永遠に 祖国を守る人柱

三、父もし亡くば母の手で 成長なして国のため
盡くせと記す我が胸に ああ戦線の夜半の月

この歌は隊長が日頃よく口ずさんでいたものであるが兵達は今宵この姿を見て、この隊長のもので隊長と共に全員死のうと最後の決心をしたのであった。

皆はそれぞれに祖国の者達へ別れの手紙を書いて背囊につめた。私は出征以来書き続けた日記帳に「これがいよいよ最後の日記です」と書いた。

死ぬる体に荷物はいらぬ

なる可く軽装になった勇士達、早くも時は過ぎ午後十時、残月は沈み、真っ暗い。「集まれ」「四列側面縦隊」北川中隊長の凜とした号令は闇に響く。「出発」中隊長の手信号。

これを合図に中隊長を先頭に五十七名がこれに続く。昼見ておいた方向を手探りで前進する。禹王山の右に当たると鞍部を越え、今度は勝陽山の南面を目指した。

足音を忍ばせ付近の物音に気を配り、静かに静かに進

んだ。勝陽山の頂上間近とおぼしき頃、にわかに目前で手榴弾が横一線になって炸裂し始めた。

真っ暗い闇の中に炸裂する手榴弾の物凄い轟音はまるで百雷のごとく、そして次から次へと間断なく投擲してくる手榴弾の閃光は真昼のように見えた。

北川中隊長は抜刀して仁王立ちとなり、突撃命令を出した。「突撃」。勝陽山にこだまする怒声にもかかわらず目前に炸裂する物凄い轟音と手榴弾の閃光を見て兵はひるんだ。「何をしとるか」「一二三で出るぞ」「一二三」「ワー」。火の海のごとき手榴弾の真直中へ五十八名は喚声をあげて突入した。

中隊長は真っ先に戦死

なお多くの友も共に倒れ傷ついた。私も右手甲に手榴弾の破片を受けたがその時はまだ軽傷ですんだ。第一線の目の敵軍は退却した。だがチェコ銃の猛射は一段と激しさを増し時は経つ。私はその時軽機関銃の射手がやられたために射手を交替した。何分間後であつたかも知れない、平野少尉が命令を下した。

「無傷の者集まれ」「点呼」平野少尉以下十一名の者

が健在であった。「よし僅か十一名で勝陽山を取ることは不可能であるが、しかしとにかく死ぬ所まで行かねばならぬ」「川戸上等兵は軽機で下から登って来る敵の援護射撃せい」と下命し、平野小隊長は九名を引き連れ勝陽山の頂上目指して登って行った。悲壮な覚悟の前進を私は見送った。付近では負傷兵が痛みをこらえながらも、うんうんうなっているのが聞こえてくる。だがしかし手だての施しようがない。

平野少尉等は猛火の中に突入し、その姿は暗闇の中に消え、遂に銃弾に倒されたようだ。悲壮な覚悟の戦死であった。何分間かが過ぎたころ、突然右肩を石で殴られたような強い衝撃を受けた。

「アッ弾が当たったんじゃ」そっと右肩に手を当てると血がべっとりとついた。盲貫銃剣ではなからうか。さらに肩の後側に手を伸ばして見ると、肩の両側から盛んに血が流れていた。貫通しているようだ。

雲すかしに見ていると山の斜面を一度逃げた敵兵が再びあがって来た。それもすぐ目前だ。後方にも敵影らしき者が動いている。山の斜面を下りてくる人影も

まばらに見えた。周囲は全く敵だ、私の身の付近では友軍の負傷兵が痛みをこらえながらもうなっている。

数名はいるようだ。苦しそうだ。が身動き一つ出来ず息を殺して腹遣った。(ああいよいよもうこれで最後か)

ふと故郷を思った、だがしかし長く考えている余裕は全くなかった。周囲は敵に囲まれていた。この瞬間私は故郷に帰り寝ていた父の夢枕に立ったらしい。そして血まみれになっている。父は目を覚まして母を起こし「庄が今死んだがよう」と言っただけで燈籠をあげて念じ、覚悟を決めたそう。それが日付も時間も全くびったりであったのに驚く。その一週間後「川戸庄治郎徐州戦において重傷」の公報が入る。

時は過ぎ夜明前、わが頂上で照明弾が打ち上げられた。それはわが軍が成功した時の合図で、後方陣地とその成功を伝えるもので平野少尉が指令した照明弾であった。あたりは急に明るくなった。友軍の負傷兵が何名かいるのがチラッと見えた。ベタッと地に伏せ息を呑む、血は右肩の両面から盛んに吹き出していた。

シューーと数秒間の照明弾はパッと消えた。その瞬

間、すぐ頭の上数メートルも離れていなかった。ワサワサ敵の語声が聞こえてきた。何を言っているのか不明であるが我等の存在を察知したものと思われた。もう駄目じゃ、その刹那そうきらめいた。菊のご紋章の入っている軽機関銃を私は持っている。それは陛下からおあずかりの兵器である。この身は死んでもいとわねど菊のご紋章の入っている兵器を敵に取られるということは軍人最大の恥辱である。陛下に対して申し訳がない。軍隊ではそのように教育されていた。しかも自分は負傷している。

そうだ、次の瞬間、軽機関銃を左の肩に山を転びながら下山した。付近にいた何名かの兵も共に転びながらの脱出となり、鉄兜は転んだはずみに外れた。無我夢中の下山で禹王山にたどり着いたころには夜がほんのりと明けてきた。敵は我等の脱出に気がついた。またまた銃弾にさらされた。岩陰を選び飛石伝いに身をちぢめ、苦難の脱出ではあったが何とか大隊本部にたどり着き軽機の返納が出来た時にはやれやれと思いつぐさま野戦病院に直行した。「危ない所でしたもう

ちょっと低かったら命はなかったですよ」看護婦さんの言葉に急に痛みが湧いてきた。流血が腹の下まで通じているのに初めて気がついた。野戦病院で応急処置のあとただちに天津の陸軍病院に送られた。結局北川中隊長初め平野小隊長以下十七名が戦死、そして残余の者は負傷で助かったとはいふものの北川隊は全滅になったのであった。かくしてわが多くの戦友は遠い祖国に思いを残し勝陽山の頂上で血を流し骨を埋め、そして無残にも大地はこれを吸収した。ああ運命の定めとはいふものの余りにも残酷な戦場であった。思い起こせばあの顔この顔がまぶたに浮かぶ。元気で懐かしの故郷に帰りたかったであろうものに、どうか亡き戦友達よ静かに眠ってくれ。戦争とは悲惨である。人間同志が殺し合うことである。戦争は絶対に再度起こしてはならぬ、起こさせてはならぬと強く思う。せめてこれが亡き戦友に対する供養ともなるであろう。